

12月10日(日)

上質の脂がつままった

オリーブ 寿司盛り

1パック(8貫)

1,000(税込)円

 **西田鮮魚店** ☎72-5246

御用聞き便専用番号 ☎090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達)

御用聞き便ポイントカード 火・水曜日ポイント2倍

今年も残すところ、あと3週間...早いですね。今年は「喜怒哀楽」が詰め込まれた1年で、気持ちも忙しくあつという間に感じました。寒い冬は嫌いで、春が来るまでどしどしと考え中です。

しかし、魚は美味しい季節になってきましたので、ご来店お待ちしております。

今回の広告は、ここ最近毎年出てくる、香川県オリジナルブランドのオリーブぶりのこのぶりは、オリーブ葉の粉末を添加した餌を一定期間与えて育てられているため、脂に臭みがありません。ハマチ以上に脂がのつていて、全然しつこくなく、あっさりとして食べやすいです。今回はこのオリーブぶり4貫、色んな味で用意いたしました。まずは、そのまま生で頂いてください。オリーブぶりの素材をそのまま味わえます。次は、白髪ネギをトッピングしますので、ネギの風味、シャキシャキ感のコラボがたまりません。

そして、次は炙り。大根おろしに少しわさびを混ぜ風味を効かせてます。醤油またはポン酢であっさり頂いてください。

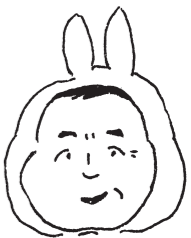
最後に、ぶりといたら照焼きも最高です。それをイメージし、炙り照焼きにしております。照焼きの香ばしさもたまりません。ぜひ、オリーブぶりを味わってください。

当店では、お歳暮商品も揃っておりますので、ご来店お待ちしております。

西田鮮魚店 副店長 越道裕子

『ゴジラと私ーゴジラマイナスワンー』

鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史



ゴジラは1954年に生れたらしい。昭和29年だ。終戦から9年が経とうとしていたとき。私は2才だ。そんなに昔からゴジラはいたのか。

題名はそのまま『ゴジラ』。その横に『水爆大怪獣映画』『見よ！大怪獣の暴威!!混乱と恐怖の大惨事!!!』とある。

太平洋に浮かぶビキニ環礁で行なわれていたアメリカの水爆実験によって焼津港のマグロ漁船『第五福龍丸』が被爆したのがこの年の3月だ。『ゴジラ』の第一作が作られたのが11月。映画では、ゴジラは核実験によって生まれたとされている。単なる娯楽映画ではなかった。

私の記憶の中にあるゴジラは3作目の『キングコング対ゴジラ』。1962年に作られている。私は小学4年生。

このころ、私はキングコングがゴジラで、ゴジラがキングコングだとばかり思っていた。ゴジラという名前はゴリラからきたものだと思ふ思うんじゃないか?それが、そうじゃなかった。小学生の私は、なかなか納得できなかった。今でも時々そう思う。

ゴジラと並んで記憶にあるのは『モスラ』。ザ・ピーナッツが歌う『モスラ〜やモスラ〜』というメロディは妙に耳に残った。八岐大蛇を思わせる頭が3つの『キングギドラ』もかっこよかった。空の大怪獣『ラドン』もいた。『ガメラ』『デストロイヤ』『ビオランテ』……………

1964年には5作目の『三大怪獣 地球最大の決戦』で4怪獣が戦った。東京オリピックの年、6年生だった。

それにしても、なんで三大怪獣なんだろう。ゴジラ・モスラ・キングギドラ・ラドン。四大怪獣じゃないか。不思議だ。まあそれはともかくポスターには『宇宙怪獣キングギドラ地球を大襲撃!ゴジラ・ラドン・モスラと世紀の怪獣戦争』とあって、真ん中にキングギドラがいる。そうか、主役はキングギドラだったんだ。ゴジラは脇役なんだ。たしかに、ポスターのゴジラは、キングギドラのハデさに負けている。あのころは、ゴジラもたくさんいる怪獣のなかの、一怪獣でしかなかったのかもしれない。

そして1966年、テレビで『ウルトラQ』『ウルトラマーン』が始まり、怪獣の顔ぶれが変わった。『バルタン星人』や『ゼットン』『ピグモン』……と。中学生だった私だが、よく見ていたなあ。



三大怪獣
地球最大の決戦

それにしても数多い怪獣たちの中で『ゴジラ』だけが今もこうして生き残っているのはどうしてだろう?とよく考える。ゴジラは精神性でもいうんだらうか。ただの怪獣ではない何かゴジラにはあるからじゃないか。『神』そういつてもいいくらいな存在。だから残った。そんな気がする。

日本ではお客を呼べなくなったゴジラはハリウッドに売られていった。

しかし、1998年の『GODZILLA』の中のゴジラは、もうゴジラではなかった。『エイリアン』になってし

ゴジラ - 1.0

まっていた。見た目も何もかも。ハリウッドが作ったらどんなゴジラになるんだろうと期待して映画を観た私は思いっきりがっかりした。アメリカ人にゴジラは精神性は理解できんと思つた。もうゴジラを見ることはないじゃろ、と。しかし、そこはハリウッドだ。姿形も元に戻って再登場した。

2014年、『GODZILLA』が公開され、世界的なヒットになった。たぶん、これがゴジラが変わるきっかけになった。CGがゴジラを進化させた。

そして2016年、ゴジラが日本に帰ってきた。

『シン・ゴジラ』だ。

監督がああ『エヴァンゲリオン』の庵野秀明というから期待した。期待通り、いや、期待を超えていた。もう、こども向けの怪獣映画ではなくなっていた。なによりもゴジラが美しく、そして恐ろしかった。やっぱりゴジラは日本の怪物だ。コンピューターやら何やら駆使したCGの威力はすさまじい。昔は、着ぐるみやらミニチュアやらで、見ている方も想像をたくましくしてイメージを補っていたが、もう、そんな必要はない。完璧に画面の中に入りこんだ。

そして今年、『ゴジラ』が生れて70年、30作目の『ゴジラマイナス1.0』が封切られた。

山崎貴監督がメガホンを取る。『ALWAYS 三丁目の夕日』や『永遠の0』の監督。私は『永遠の0』には感動して二度見た。岡田准一扮する特攻のゼロ戦のパイロットに心ひかれるものがあつた。戦闘シーンもリアルだった。山崎貴監督ならまちがいない。

今度の舞台は、終戦間もない日本。神木隆之介が演じる主人公敷島浩一は特攻から逃げ帰ったパイロット。『永遠の0』に重なった。2人の主人公の沈痛な表情に、あの時代に生きた青年の絶望が垣間見えた。そして、敷島は、ゴジラに立ち向かうことで、絶望を克服する。彼らを描く、私よりひと世代若い山崎監督の視点は、どこまでも優しかった。

そしてゴジラ。ここにいるゴジラは『シン・ゴジラ』よりさらに美しく恐ろしかった。あのゴジラのテーマ曲が流れ、ゴジラが姿を現す。息をのんだ。ゾクゾクした。

映画を観る前に、野暮用があつて新興運輸の松田さんに会いに会社に寄った。「どこに行くの?」と聞かれ、「映画を見に」。すると、「首?」。ビートたけしが監督した『首』という映画が話題になっているが、まだ封切り前だった。松田さんも映画ファンなんだと言う。「いや、ゴジラ マイナス1.0」。「えっ?ゴジラ?」。なんで、ゴジラ映画なんか見に行くんだ?という感じで聞き返す。どうやら松田さんの中ではモスラやキングギドラのころの印象があるらしい。あれやこれやと説明したが、もうひとつピンとこないらしい。こんな映画を見るときは、例によってソレイユの大画面、大音響のIMAX。これしかない。

映画館のホールの壁一面に、過去のゴジラ映画のポスターが40枚ぎっしりと貼られている。おじさんたちは、みんな写真におさめている。もちろん私も。

で、どうだった?」

「松田さん、見に行きんさい。悪いことは言わん。だまされたと思うて見んさい。間違ってもテレビで見て、見た気になっちゃあいけんよ。IMAXで見んさいよ。ゴジラが、ほんまに恐ろしいけん。」

2023年12月10日